

鏡と再認の構造

—H・ワロンの身体意識論—

鈴木 一 策

I. はじめに

感覚論的・経験論的イデオロギーは、巷間にあふれている。それは、既に形成せられた再認 *reconnaissance* の構造（それは同時に否認 *méconnaissance* の構造でもある）を前提し、その構造を通して、鏡に向かい、そこに、客観的な像を確認できたとする。例えば、感覚論者の仮説は、かの再認の構造の成果たる心的内容＝知覚内容 *perception* を、諸心像 *images* に解体し、更にはこれら諸心像を、諸感覚作用 *sensations*⁽¹⁾ に還元し、しかるのちに、形式的で、任意な再構成という操作を加えて、元の知覚内容を得るといった同語反復的性格を呈する。この仮説の性格そのものが、鏡像の再認の構造なのである。まさに、イデオロギーとは、主体にそのイデオロギー性を意識させない、再認の構造に他ならない。

「まだ、しばしば、知覚は、それが生みだされる瞬間に、実在を模写したものであるかのように、実在と厳密に照応したものとして定義されている。」（ワロン『行動から思考へ』p. 181）しかるに、知覚を生ぜしめる刺激が、いかにその知覚の内容とかけ離れたものであるかが、様々の観察から知られているのである。本稿にふさわしい例を挙げれば、ある種の精神病者は、「他者との境目がないという印象をもち、自分の活動、自分の話、自分の考えが他者に知覚されているのだということ、それが他者によって、自分に強制されているのだということが、交る交るに、心に思い浮かべられる」といった症状を示す。「例えば、腹の中、胸の中、頭の中、ひょっとすると耳の中に声がする」（ワロン『性格の起源』p. 180）という。これが、所謂「体感幻覚 *hallucination cénesthésique*」ないしは「幻聴 *hallucination auditive*」である。こうした現象は、感覚論的偏見から見れば、「体感 *cénesthésie*」の異常ということか

たづけられるかもしれない。ところで、この「体感」とは、便利な言葉であって、心理現象を、生理現象をも考慮に入れて扱っているのだという錯覚を与えるのに一役買っているものである。シェリントンやヘッド、あるいはピエロンの研究を踏まえて、ワロンが定式化した・自己知覚、内部知覚、外部知覚、情動を無視して、「体感」という言葉は、それらを、あいまいな形で統合するかのような、内観によってのみとらえられる身体意識、即ち、意識 *conscience* の特殊形態と同一視されるのである。それでいながら、生体＝身体の直接的な心像＝表象 *représentation* だとされているのである。「体感」説は、要するに、心的現象を、諸心像に解体し、それらを再構成するという事に帰着するのである。こうした立場から先述の患者は、同一の声〔刺激〕を身体の色々な部分に聞くという知覚異常とみなされ、自分の身体と他人の身体とを区別できぬ身体知覚の異常とみなされるわけである。しかるに、ある刺激とある心像との直接的、一対一対応的な結びつきを求める発想を捨てて、しかも、通常人の場合にも見られる現象、子どもに見られる現象と比較してみると、全く異なる見解をもつことが可能である。即ち、人が止むに止まれぬ苦しみをかかえた時、どこが苦しいのか分らないと不安でたまらず、医者に病名を言われると安心するように、心の諸状態を、空間的に表現する欲求は、人間に本質的なものであるから、患者が、どこに、知覚内容を定位するかよりも、定位ということ自体が本質的だということ、従って、これは、単なる知覚の異常ではありえないということ、更には、私と他者との区別、能動的なものと受動的なものとの区別ができていないということとである。後者の主・客未分ということこそ、他者との境界がないと患者に感じさせる当のものであると同時に、他人の声と同様に自分の声までもが自分の身体（＝他人の身体）で聞こえると患者に感じさせるものなのである。この具体例によって、感覚論的な体感説の誤りが指摘されるばかりではなく、これらの現象は、退行現象であって（単に異常なのではない）子どもの主・客未分状態を暗示してくれるのである。

実際、子どもの身体意識は、知覚を多数つみ重ねていけば獲得できるものではなく、他者との未分化状態から、正確に言えば、鏡像との未分化状態から脱

出することではじめて手に入れられるものなのである。この脱出は、単なる認識論的な操作ではあり得ず、対人関係を、文化の秩序、イデオロギーの構造を媒介とした存在論的な脱出なのである。

本稿の課題は、絶対神のイデオロギーにとらわれ、視知覚の特権化に支えを求めて、H・ワロンの身体意識論を、主知主義的なものと断罪した・メルロ＝ポンティの所説と対比しながら、ワロンの論理を整理しようとするものである。

引用は、すべて原文からのものであるが、邦訳があっても、そのページは示さず、拙訳のみを用いた。傍点は筆者のものである。

『性格の起源』は、Les origines du caractère chez l'enfant, P. U. F. 1973.

『行動から思考へ』は、De l'acte à la pensée, flammation. 1970. を示している。

II. ワロンの超知覚空間論の展開

まず、ワロンの知覚論を、必要なぎりぎりで素描しよう。人間の子どもは、動物と違って、相当長期にわたって親に依存せざるをえない。この依存関係が情動エモーションという生理現象に社会性を与えている。情動は本源的な親子の交流手段、即ち言語に他ならない。この情動が支配的である時期が、人間の子どもでは、道具的知能、運動能力の行使に先立って長期に存在するのである。この情動の特色は何か。それは、伝染性ということであり、条件反射的な混同性 *syncretisme* [=主客未分状態] である。情動には、各情動特有の生理反応と身振り・表現がともなうが、表現形式を与えられるとともに弱められ、意味を帯び、意識の萌芽形態となる。まさに、この情動に対立するのが知覚作用なのである。両者は、なるほど姿勢活動とその自己知覚とを媒介している点で、相互に移行しやすい関係にある。例えば、ある一点をずっと見つづけていると、その対象にひきこまれてしまうといった事態である。しかしながら、六ヶ月頃になって視知覚が安定したものとなってくる時、それ以前では、近くの子が泣きだ

すと伝染して泣いていた子が、泣いている子を眺めている例にみられるように、知覚作用は情動を静める関係にあるのである。内部知覚器の興奮（尿意、空腹など）、自己知覚器の興奮（体位姿勢に対して主として関節が感じる）のみを中心として、親と情動的交流をする他ない生後数週間の新生児は、かの条件反射のメカニズムによって、母親と完全に一体となっている。この混同的条件反射は、情動時に周囲に単に共存したものをすべて融合してしまうのである。主客図式では決して把握できぬ事態である。こうして、ワロンの条件反射論は、要素主義的な連合理論に対立する。知覚作用はこうした条件反射的な情動とは相違する。なるほど知覚作用も、現在のな実在にしばられている点で条件反射に似てはいる。しかし、「知覚作用はすでに精神の行なうシンボル機能である。」（*Encyclopédie française*, tome VIII 8・32-2）それというのも、予期という姿勢活動が能記のはたらきをするからである。情動的融合状態から最初の外部知覚たる聴覚が出現する様をワロンは、説得的に描写した。それを例解としよう。母親が乳を与えるリズム・回数、おしめを変えるリズム、だきあげるリズム等々によって、即ち、極論すれば、民族や社会のあり方に応じて異なる文化的秩序としてのこれらのリズムによって、子どもの内部・自己知覚は分節化される。子どもの満足と母の声、母の足音、母の乳のニオイ等々は混同されるが、それらはそれとして分節化されはしない。しかるに、生後三週目に、人声が止むと子どもは泣きだした。今まで安楽状態と共存していた人声が欠落し、そこに、欠落した感じが生ずる。欠落は、期待＝予期＝探索のきっかけとなる。ここに情動的興奮 sentir は、本源的な聴知覚 resetir（＝予期）へと分化するのである。耳をそばだてて聞こうとするから聞こえるわけである。因みに、子どもの食餌活動に無関係の物音には必しも反応しない。耳は、子どもの受動性にふさわしい器官であることから聴知覚は早くから分化しはじめるが、これに比して、視知覚は、頭と目との協応関係が成立する、即ち、首がすわり始める三ヶ月目からやっと安定したものとして分化してくる。視知覚も同様に、視界から、情動的に共存していたものが消え、それが視知覚に能動性を発揮する、つまり追いかけるきっかけを与えることにより分化してく

る。子どもの外部に対する最も能動的で弁別力のある視知覚の分化は、こどもの反応を、自己・内部知覚にもとづいた反応から分化したものにすることの多大の貢献をするのである。子どもは、もはや、腹が減っていないとしても、対象を見て反応するようになるのである。知覚野が統一されると、つまりまなざすという姿勢が固定したものとしてつくられると、それと相関的に、直接的な印象を切断し始める。この知覚の次元にも再認＝否認の構造が存することに注目したい。ワロンは更に、西欧の伝統に反して、触知覚にも言及する。⁽²⁾「二十三週目では、何気なく活動している時に、たまたま自分の一方の手で、他方の手をつかむということが生じる時、子どもは、さわられた手をびっくりして眺める。その生気のない手は、疑いもなく、能動的な手よりも、そこで生じる一連の興奮の流れを予想しにくいので、ますます子どもの注意をひくのである。」

(『性格の起源』p.211) 能動的な手は、自己の予期を裏切られ、いわばその姿勢をくずされ、驚きという情動をもたらす。姿勢は建て直される。こうして、接触の特権的な道具たる手は、口、足、物体等々に触れ、予期＝再認の姿勢を系統的につくってゆく。それは同時に、直接的な驚きの情動、接触からくる笑いの情動などを否認＝弱化することでもあるのである。再認＝否認の構造はここにもある。こうして、六ヶ月以降という「みだらな社交性」(ワロン)の時期、「鏡像段階」(ジャック・ラカン)が始まるのである。

以上、ワロンの知覚論から結論されることは、第一に、子どもの知覚作用は、親の介在をもってはじめて発動するということ、第二に、知覚作用は、再認＝否認の構造をもつこと。第三に、再認の手段はシンボルではなくシンボル化せんとする姿勢であること。第四に、聴知覚、視知覚、触知覚(その他の知覚も)は、みな本質的に同一の構造をもつこと。ただし、対象弁別力の点で視知覚が優れていることである。

我々は、ここから、早速核心に迫らねばならない。紙数の関係上、詳論は避けざるをえないからである。

先に、ワロンの所謂「みだらな社交性」という規定をあげたが、視知覚が内部知覚から分化したために周囲の人々との情的交流のきっかけを多くもつよう

になった子どもは、六ヶ月以降、はじめの六ヶ月の四倍、二年目にみられる頻度の三分の一をこえる全くみさかいのない他者との社交を開始するのである。

（『性格の起源』p. 249）そしてみだらな社交は、鏡像ともかわされるのである。こうした情動交流のために、主体と客体、子どもと他者とは未分化であり、当然子どもの身体像と他者の身体像とも混同されるのである。この段階では、身体の部分像にだけではなく、等身大の肖像画にもほほえみかけるように、他者の全身知覚能力は前提される。

子どもは、自分の〔観察者の目からすれば〕鏡像よりも二ヶ月も先の六ヶ月目に、父親の鏡像にほほえみかける。しかし、父親の声がうしろから聞こえると、予想を裏切られ、びっくりしてふり向いた（実例Aの①）。まず第一に、子どもは、再認＝知覚しなれている父親にまなざしを向ける。いうまでもなく、自分の全身像はそれまで一度も見たことはないからである。第二に、子どもは、鏡像を実在視していた。第三に、聴知覚という視知覚にとって外的な知覚を刺激されることによって、ふりかえるという身ぶりが生じ、この身ぶりが実人物と鏡像とを結びつけたのである。

他人の鏡像に対するもう一つの例を挙げよう。Aの①の例の子は、その後、鏡像をみるとすぐに父親の方をふりかえる遊びをやっていたが、七ヶ月目に、透き通ったガラスの背後に父の姿を見てまごついた（Aの②）。この例は、子どもが、まだ、鏡像を実人物と混同していることを示している。このことは知覚能力の不全のせいではない。

二つの例からは以下のことが帰結する。Aの①の、ふりかえる身ぶりは、外的刺激から生じたものであるが、単なる転移 *transfert* によって「鏡像は、子どもに直接達するような刺激がなくとも〔父の声がしなくとも——訳者〕実物の方へ子どもをふりむかせる力をもつようになる。」（『性格の起源』p. 223）ここに、諸知覚器を身がまえさせるといった姿勢活動を媒介とする、しかも、目の刺激にあくまでもしばられている知覚作用とは異なる反応が生じているのである。この身ぶりは、実物と鏡像〔これは直接知覚できる〕とを結びつける＝推理する手段となっている。「身ぶりはその場に実際にはない対象を、い

わば現前化せしめ、不在の対象の代り〔＝表象 *représentation*〕をすることができる。』（『行動から思考へ』p.128）この身ぶりは、鏡像空間からも、実人物からも、ふりかえる（＝抽象＝捨象＝否認）ことによって切断された超知覚空間をなす。しかるにAの②の例は、この超知覚空間に、鏡像が統合＝再認されていないことを示している。子どもは、「一種の空間の実在化 *réalisme spatiale*」（『性格の起源』p.225）に陥っているのであって知覚に異常があるのではなかった。生理的条件が整いはじめて間もない六ヶ月以降では、姿勢は安定を欠いている。そこで、身ぶりも安定したものではないのである。

次に、子ども自身の鏡像に対する反応を分析してみよう。ワロンはそれを四段階に分ける。Bの①、鏡像＝他者＝自己の同一視の時期、八ヶ月。ダーウィンの報告では、子どもは、自分の像にアッと《Ah!》驚いたという。（これは所謂カール・ビューラーの、あはあ体験 *Aha-Erlebnis* である。）Bの②、鏡像の実物への即座の還元、十二ヶ月目。ギョームの娘は、鏡の前を通りかかった時、朝からかぶっていた帽子にすぐ手をやった。Bの③、鏡像ではなく、手鏡という道具の方に興味を示す時期、十四ヶ月。これはチンパンジーの年齢と呼ばれている。Bの④、鏡像と実物たる自分との分化を前提したうえでの鏡像との汎心論的な遊びの時期、十五ヶ月。

我々の主要な関心は、Bの①から②への飛躍は如何にして生ずるかである。即ち、①の段階のように、鏡像と他者、鏡像と自分、他者と自分といった双数の関係から、自分がここに感じている空間と、鏡のあそこの空間とをこえる第三の空間への脱出はどうして可能かということである⁽³⁾。

同一物が同時に複数の空間に存在するという見方は、レヴィ・ヴリュールが研究したように「未開」民族にみられるが、子どもも同じである⁽⁴⁾。自己知覚に合致する空間と、自己の外なる外部知覚空間（鏡像）とに、同時に在をおかしいと思わないのが、この時期の子どもなのである。これが混同心性^{サンクレンチズム}の特色である。従って、こうした段階の子どもには、両空間を直接比較できないのである。両空間が外的な関係にあることを直観するためには、まして、両空間が実物とみかけという物理的反射関係にあるということがわかるためには（勿

論、この物理学的知識は、この段階の子どもとは無縁であり、ワロンも「外的な関係」とだけいっている）どうしても、両空間に共通な分母が不可欠なのである。これは大人には何でもないのである。再認＝否認の構造が既に心的に実現されているからである。しかるに、この事態は「知覚＝運動の現在をこえてた所で展開する能力を前提するところの・諸知覚内容 images と諸視点とを相互に置きかえるという事を含んでいるのである・即ち、現在の諸知覚内容に対して、純粹に潜在的な表象の諸体系をよびさます能力、あるいはむしろ、直接経験にとつての諸所与を純粹な表象作用へと従属化させる能力、従つてまた、諸表象作用を媒介とすることによって、徐々に区別と等置〔否認と再認—引用者〕とのより分化したはたらきを増大させてゆく能力を前提とした置きかえを含んでいるのである。これは、シンボルにもとづく活動の前兆であるが、シンボル活動によって精神は、知覚の諸所与を世界にかえるに至るのである。」『性格の起源』p. 231)

ところで、先に、他者の鏡像を前にした子どもの、みかえりの身ぶりが超知覚空間たることを示したが、この身ぶりがまさに、この自分の鏡面上の身体像の場合でも、それをこえる空間なのである。ふりかえりの身ぶりは最初、実物空間と鏡像空間とを併置する *juxtaposition* だけであるが、十二ヶ月をすぎると、超知覚空間として安定したものとなる。ちょうど同じ時期、受胎されたバイバイの身ぶりが、寝る時に習慣化されている。そして二十二ヶ月目では、人がいなくなる時にも、絵本のページがめくられる時にも、類推の手段として用いられるのである。(『行動から思考へ』p. 128)。このような例にみられるように、ふりかえる身ぶりによって、超知覚空間が出現し、ここにシンボル機能の訓練がなされるわけである。「シンボル機能は、ある対象に対して、その対象の表象を見だし、また、その表象に対して、ある記号 *signe* を見いだす能力である。」(『行動から思考へ』p. 192) いったんシンボル機能が成立してしまえば、その機能は、なにらかのシンボルを求める。表象は、能記(音声・文字・身ぶり)なしには現存在 *exister* しえないからであり⁽⁵⁾、またソシュールの言うように、能記と所記との関係は一義的ではないからである⁽⁶⁾。こうし

て、かのふりかえる身ぶりに支えられて出現したシンボル機能は、鏡像をそのシンボルとするに至るのである。「鏡像はその存在性をひきぬかれて、全くシンボリックなものになっている。」(『性格の起源』 p. 231) 鏡に映るこの顔を、私の顔としてみる再認の構造が出現するためには、以上のようなプロセスが不可欠なのであった。

しかし、これで身体観念が完成したのではない。なるほど、それは他の諸観念、諸意識に優先して生じてくる。「それというのも、身体観念ほど、内部知覚にもとづく諸欲求と、外界との諸関係との合流点に近いものではなく、意識のその後の進歩にとって不可欠のものはないからなのである。」(『性格の起源』 p. 235) しかし、それは、それだけであるものではなく完全にできあがるためには更に高い段階からの仕上げをうけねばならないのである。こうして、三才の危機において成立する自我の意識に密接に統合化されるだけではなく、「身体観念はまた、子どもが自分と物理的環境、社会的環境との関係を確定することを大人から学びとる時に、枠組とする諸表象を心に思い描くために、多かれ少なかれ存在していなくてはならないものなのである。このようにして、身体観念は、その時代に固有の生存のための諸技術、即ち、言語の諸形態、諸風習、諸信仰、諸知識等々によって、子どもが据えられている・生活と思考との諸条件に枠づけされる modeler ののである。」(『性格の起源』 p. 235) かの超知覚空間の出現が文化の秩序の影響のもとになされたことからすれば当然のことであるが、「体感」の名のもとに、身体諸器官や諸機能から直接えられる心像を源初的なものとする感覚論を粉碎するものとして、身体観念は文化の秩序にわくづけられた歴史的なものなのである。そしてこの身体意識＝観念の成立にも、再認＝否認の構造が働いていることを、イデオロギーの圧倒的な影響に抗して、明らかにしたのはフロイドであったのである。裸になって話せばわかるといった常識に反して「実際自分の身体の観念は、フェティシズムの思考と、物理学による思考とでは、厳密には同じでないに違いないのである。」(『性格の起源』 p. 234)

III. メルロ・ポンティの所説

鏡像ほど、生々しく記号性から遠いシンボルもあるまい。動物の叫びをまねた声、象形文字に比してみれば、そのことは明らかである。それ故に、シンボルでありながらも、大人でさえ、人物の準現前とみなさざるをえない力をもっている。そして、メルロ・ポンティも、この鏡像の性格に着目し、子どもの視知覚にとって特別の意味のあるものとしているのである。我々は、この特別視のなかに深い意味を掘りあてようというのである。

モーリス・メルロ・ポンティは、その初期の講義録（『幼児の対人関係』Maurice Merleau Ponty, *Les relations avec autrui chez l'enfant. Les cours de Sorbonne, Centre de Documentation Universitaire, 1951.* ——『対人関係』と略記し、原文のページのみを示す。）のなかで、ワロンの『性格の起源』とラカンの鏡像論とを中心とした仔細なる検討を行なっている。まずポンティのワロン批判の骨子を要約し、しかるのちに、ポンティ自身の見解を紹介しよう。

ポンティは、「ワロンは、鏡像の研究の中で、鏡像を積極的な仕方では殆んど特徴づけていない。彼が我々に示すものは、どのようにして、子どもは、鏡の像を実物でないものとしてみなすことを学び、それを実物に還元することを学ぶのか、どのようにして、子どもは、最初、鏡像に与えていた準・人物という価値を、鏡像からうばいとる・迷いからのめざめを実現するかなのである。」

（『対人関係』p. 55）と不服気に述べている。ポンティにとって準現前の宿る鏡像を、分析的＝反省的に、みかけとしかみない物理学の教養は、子どもの意識の極北である。にもかかわらず、ワロンは、子どもに、その知識を要求しているというのである。子どものチンパンジー的＝道具的態度に触れた所で、従って、厳密には、鏡像と関係しないところではあるが、ポンティは次のように言っている。「[ワロンがいうように] 像が実物と関係があるということが厳密に意識されるためには、鏡の役割についてのなにかの知的理解 *intelligence* がなければならないと思われる。だが、鏡は何かが全く理解されておらず、子

どもが鏡の背後に何か鏡の面に見える諸対象のごときものがあるのではないかと期待しているかぎり、子どもはまだ完全には、反射の存在を理解していなかったし、完全には、像というものを理解していなかったということなのである。」完全なワロンの歪曲がここにある。ワロンは、鏡像との情的交流では、自己内部知覚される私の空間と、鏡像の空間との間に境目がなく、他者の像とも、他者の実物の姿とさえも混同されている鏡像を前にして、両空間に「外的関係」「本当の従属関係」(『性格の起源』p. 225) はどのようにしてつくられるかを問うていたのであって、決して知識なるものを要請したのではなかった。なるほど「従属関係」のなかには、そうした物理学的知識による場合も含まれるが、ワロンが示したのは、ポンティのいう概念知とは程遠い、ふりかえりの身ぶりなのであった。ポンティは、ただの一度も、かの超知覚空間と身ぶりとを対応させてワロンを理解せず、主知主義的な解釈だとしてワロンをしりぞけるのである⁷⁾。ワロンの論理展開がなお充分ではなく、読者に推論を課す点がないとは言えないが、それにしても奇妙なことである。このポンティの歪曲の裏には次のような意味が隠されていると筆者は考える。それは、ワロンの超知覚空間なるものを、物理学的知識と置きかえることによって、超知覚空間なるものを弱体化＝抹殺せしめんとすることである。これはいいかえると、鏡像認識は特権的知覚たる視知覚のみで、なんとか可能になるようにしたいということである。筆者は、この置きかえを、先に歪曲といったが、それは正確ではなかった。これは、まさに、無意識の否認＝再認なのであるのだから。ところで再認とは何か。まさにイデオロギーである。ポンティは、西欧の伝統に従って、明確に、視知覚の特権性を力説している。長くなるが引用すると、「ワロンを読んでみると、時々、鏡像の獲得にあっては、認識即ち、ある諸視知覚内容とある諸内部知覚内容との総合とでもいうべきもの *une synthèse* の操作が問題なのだという印象をうける。しかし、視知覚内容は、精神分析学者達にとっては〔ポンティにとっても——引用者〕単に、他の諸知覚内容と相並んだ、一つの知覚能力の型なのではなくて、他の諸知覚能力の様式がもっているものとは、主体の生活にとって全く違った意義をもっている。目とは、光景を

見る感官であるが、また、想像的なもの *imaginaire* をも見る感官なのである。我々の諸心像 *images* は、圧倒的に、視知覚的なものであるが、これは偶然ではない。諸対象にたいして充分な支配力を発揮しうるのは、視知覚を手段としてだからなのである。それ故に、自己自身についての視知覚経験が与えられるとともに、自己自身との新しい関係様式が出現することになるのである。視知覚によって、直接的な私と、鏡の中に視知覚できる私との間に、一種の分裂が可能になるのである。それ故、諸知覚の機能そのものも、それらが主体の実存にどのような寄与をしうのか、この実存の発達にどのような構造をもたらしうのかということから、規定が詳しく行なわれるのである。」(『対人関係』p. 58) という。もう一つの引用を許されたい。「私が感ずるがままの〔ポンティは他の所で、これを触知覚で代表させているので我々も今後彼にならうことにする——引用者〕私と、私が私を見るがままの私、あるいは、諸他者が私を見るがままの私との間には、葛藤がある。」(前掲書, p. 57) そして、この視知覚の特権性と相補的に、鏡像そのものの特権性が揚言される。それは究極的に鏡像の物神化である。「鏡像の一般的機能は、我々の直接的現実から、我々をひきはがすということになるであろう。それは、非現実的機能といえるであろう。」(前掲書, p. 57) これは、事実上、インクのしみは、それ自体が我々の頭に観念をよびおこす機能をもっており、声それ自体が神の声であるというに等しい。ところで、ワロンはこうした視知覚特権視に対しなんといっていたであろう。「こうして〔六～九ヶ月では——引用者〕子どもは、自分の前に、自分の外部知覚的自我を見ても、それを補体 *complément* とでもいうべきものの、外界に向った能動的な私の自然なる形象のごときものとしてうけとって、なんの困惑も、不統一も感じないように思う。」(『性格の起源』p. 22t) 一方は葛藤があるといい、一方はないという。この相違は何であろう。勿論、視知覚特権視の有無は前提としたうえでのことであるが、それは、ワロンが、身体意識を問題としているところに、ポンティが六ヶ月目から実に三才にまで及ぶ範囲で考察せねばならず、情的交流のなかでの役割交代を通じて人格を形成してゆく、自我意識の問題をオーバー・ラップさせた点にある。ワロンも、嫉

妬と共感との対人的情的交流内に、主＝奴関係の「自動的な論理」(『性格の起源』)即ち相互反転をみ、役割交替のうちに、主体内に二つの立場が内面化する過程をみているが、ポンティは、この情的交流内の両義性(ワロンは、フロイトのエディプス・コンプレックスをこのようにとらえた。『行動から思考へ』p.156 参照。)を、鏡像のレベルにもち込んだのである。ワロンの主知主義的理解に対立した情的交流というわけであろう。しかしながら、視知覚の特権視したうえでの情的交流の導入は、結局は、思惑に反して、主知主義的な結論に達することになる。即ち、鏡像とのナルチシズム的交流ということである。それは、「自己自身をみつめる態度」(『性格の起源』p.57)である⁽⁸⁾。こうして、ワロンのふりかえる身ぶりに対立するものは、視知覚の特権視、鏡像の物神化、ナルチシズムという観想的感情だということになる。後三者がすべてナルシスの神話を支える契機であって、要するに視知覚の特権性が問題なのである。ワロンとポンティとの扱う対象のズレを考慮に入れたとしても、両者の相違は、結局のところ、視知覚の特権視するか否かにかかっているのである。

さて、ポンティは以上のように、視知覚の特権視しているのであるが、そうであるにもかかわらず、ワロンの超知覚空間論が気になるものとみえて「ワロンのいうように、この二つの空間〔触知覚空間と視知覚空間——引用者〕を直接比較することはできないのであって、それらが互いに別々の地点にあることを明確に直観するためには両者の間に一種の共通分母がなければならないが、そうしたものは知覚的経験には与えられるものではない。」(『対人関係』p.60)と述べている。しかし、ポンティの叙述は動揺をみせ、両空間に、遂には「一種の距離をもった同一性」(前掲書、p.60)を設定するに至っている。要するに視知覚のもつ距離感に訴えようというのであろう。しかしこのようにしたところで、視知覚は越えられてはいないのである。

ポンティは、こうして、鏡像の物神化と、視知覚の特権化とを相即的に行なうことにより、視知覚主体の中心を維持していたのである。それは、その上に超自我を重ねられるところの生きられる私である。それは、ワロンの身体意識に反して、文化の秩序から離れた所で純粋に存続し続けるであろう。

IV. おわりに

ワロンの研究から、我々は、身体意識は、源初的に中心としてあるものではなく、むしろ、文化の秩序を媒介として（シンボルとしての鏡）はじめて、中心化するものであることがわかる。この中心化は、これも文化の秩序の媒介により分節化した諸知覚を否認し、同時に、それら諸知覚を越えるシンボル機能の再認によって果たされているのである。この構造は示唆的である。というのは、自我の出現、超自我の出現、そして階級的自我の出現までも含めた自我論への展望を与えてくれるばかりでなく、そもそも、イデオロギー論の根本構造を指示してもいるからなのである。ここで我々は、キリスト教の三位一体説についてのアルチュセールのことばを思いだす。「三位一体の教説は、大文字の主体が、小文字の主体に二重化することと、両者の写鏡的關係についての理論そのものなのである。」(Louis althusser, "Ideologie et Appareils ideologiques d'Etat," *La Pensée*. juin 1970, p. 34) そしてこの関係の内部では、従ってこの関係を理論として対象化していないかぎりには、我々は、ただ耳を傾けるだけで神の声を聞き、ただまなざすだけで神の姿を（イエス＝キリストのもとに）見るのである。

- (1) J-F・ルニは、sensations を科学的用語ではなく、刺激 stimulations の意味として使うべきことに注意している。ルニはワロンの弟子である。J-F Le Ny, "Le matérialisme et la Psychologie sociale." *La Pensée* No.112, 1963, p. 77.
- (2) émotions は、とりわけ原始的な笑いと涙とは、くすぐりによって得られる。触知覚とパトスは密接な関係にあるといえよう。木村重信氏は、その著『美術の始源』（新潮社、1971年）の「触覚について」という節で西欧の主知主義的な美学の流れと、触覚の軽視、視知覚の特権視との相互関係を明快に説いておられる。視知覚は能動的な知そのものとみなされパト斯的な意味を含むことが軽視されたことに対し、「パト斯的な触覚的体験が、内にロゴスのな法則性を宿すものである以上、触覚は身体的な表現的自己の、いわば先端であるといいうる。」（前掲書、42頁。）といわれる。
- (3) 勿論、「ここ」と「あそこ」とは便宜的表現なのであって、子どもにはこうし

一 橋 研 究 第2巻第1号

た境界は意識されていない。

- (4) 入眠時、おぼれかけた時にかぎらず生じ得る分身現象は、子どもの段階への退行である。
- (5) マルクス『資本論』の「価値形態」と価値そのものとの関係も同様である。
- (6) 二つの外国語を交互に無意識に話す子どもが従っているのはこの能記と所記との分離の関係である。
- (7) 玉田勝郎氏は、拙稿同様、ワロンとポンティとの鏡像論の比較を試みておられるが、完全にポンティの立場にたっておられる。玉田「鏡の中の身体像」『婦人教師』1973年5月号。
- (8) ワロン情動論では、こうしたナルチシズム的性格を、痛みのためにうめいている情動にも認めているが、視知覚と結合しあったナルチシズムは観想的=知的なものと断ぜざるをえない。(『性格の起源』の第一部情動論参照)

(筆者の住所：調布市染地3-1-74 多摩川住宅は-14-407)